

# 近代における児童の教育と福祉の思想的な関連について(四)

田中 未来

## 一 はじめに

前稿までの三回にわたり、ルソー、コンドルセ、およびペスタロッチの著作を中心として、各の思想に含まれる教育と福祉の接点とをいうべきものを概観して来た。

本稿では、ロバート・オウエンの著作を中心として、引つづき同様の観点から考察した上、それらの一連の流れをたどることにより感じたことをまとめて、この試論を終りたいと思う。

時代的な背景を見れば、ルソーは、絶対主義末期にあつて、来るべき新しい社会を望む立場にあつた。つぎにコンドルセは、市民革命の典型といわれるフランス革命を推進した当事者の立場から、法制の確立の中

で民衆の福祉と教育との統合を考えている。またペスタロッチは、ほぼ同時代から、一九世紀初頭にかけてのスイスを背景とし、旧体制の王政の名残りに加え、手工業的資本の浸透によって一層混乱し、さらに隣国の革命の余波に動揺させられた農村社会を目のあたりにしながら、同じ様な問題にとりくんで来た。

この稿でとりあげるロバート・オウエンは周知のとおり、すでに近代の産業革命の進行しつつあるイギリスにおいて、工業資本主義の発達のただ中に、工場経営の当事者として、初期資本主義のもたらした利益とともに、その中にすでに生じた大きな矛盾ととりくんでいる。そして、この解決を、教育と社会政策の両面から試みようとしているのである。四人の思想家は、

ともに近代の形成の歴史の中で、その社会的変動の渦中に身を投じつつ、教育と社会の関係を探求しようとした点に共通したものがみとめられる。

ここでは前稿までの観点にしたがい、ロバート・オウエンの若干の著作をとりあげながら、第一に教育による福祉の増進について、第二に児童の人権を守る上での教育と福祉の結合について考えてゆきたいと思う。

## 二 教育との福祉の関連について

### (一) ロバート・オウエンの意味する「福祉」の解

釈

ロバート・オウエンは、あらゆる論文の中で、「人間の幸福」「人類の福祉」を究極な目標としてかかげている。happiness と welfare とは彼の論文の中では、ほぼ同様な意味に使われている。彼の主題の一つは、「最大多数の最大幸福」とあるといわれ、これ

が、友人ペンタムの功利説の影響によることは諸家のみとめるとおりであるが、(芝野庄太郎氏、ロバート・オウエンの教育思想その他)その内容は、資本主義を肯定したベンタムのそれとは異っているといわれる。渡辺義晴氏によれば、

しかし、その注(ベンタムの思想の)根本にはブルジョアの自由放任の個人主義があったわけで、これはオウエンと一致しません、ですからこれは「最大多数の最大幸福の思想のうち、社会主義的、大衆的である側面を、利用できるだけ利用したというように解釈されるのでしょう」(「社会変革と教育」解説より)とある。

オウエンの「最大多数の最大幸福」とは、彼独自の意味をもち、「最大多数」のかげにかくれるただ一人の不幸なものがあってもならないとしていることは、たとえばつぎの文でも明らかである。

「今ここに提出している諸原理は、いかなる階級をも一否一人の個人をも害することはありませんとい

うことがわかるであろう。それどころか、世界という大家族の成員は一人として――最上層のものから最下層のものまで――この原理を公けに弘布することから、最も重要な利益を享受しない者はないのである。」（『新社会観』第三論文楊井克巳氏訳より）

しかもそれは、さらに具体的にいえば、労働階級の利益を直接の目標におくことにより、ひいてはすべての階級の利益をもたらすことになると考えているのである。たとえば、

「人口の大部分は労働階級に属するか、または労働階級の出身であって、最上層階級をも含めた全階級の幸福と安楽とは、労働階級によって本質的に左右されるものだということを考えるべきである」

（『新社会観前掲より』）

という風に、彼は「最大多数の最大幸福」という言葉を転用して、彼自身の主張のために使っている。ブルジョワ的功利主義の立場からは、人間一般の観念は「ブルジョワ」を典型として考えられているが、オウ

エンの場合、「人間一般」の典型は最も数多い階層、すなわち貧困な労働階層を典型として考えられている。

さて、その幸福の概念の内容を少し分析してみたい。彼はこの点に関して、

彼らは、よき、すぐれた性格が自らの幸福に必要なと感じる。富が自分の幸福に必要なと感じる。彼らは、両方のものを求めているらしい。

（『オウエン自叙伝』五島茂氏訳より）――傍点は本稿で仮につけたもの――

と端的にのべ、他の論文でもしばしば同じ主張をくりかえしている。

すなわち彼は幸福―時には福祉と記してある―の条件を、精神的なものと、物質的なものとの両面にわたって考えており、しかもその両者は単に併列的なものとしてでなく、統合されなければならないし、またそれは可能であるとしている。彼は自叙伝でつづけて

これら二つのもの（よい性格と富）が共に得られるような科学がいろいろと発見されて来たことが、現

代を人間生活での最もすばらしい時代とするのである。

といっている。この自伝は晩年の著作であり、ここにいう「科学」を彼が発見した経緯については後にのべるが、この二つのものが両立することは彼の生涯をかけての課題であったのである。

要するに彼は幸福の意味を、人間が人間として生きるよろこびを感じうる状態と考えていたものと思われる。

しかし現実には、その全く反対の状況で、すなわち、物質的には貧困の底にあえぎ、六、七才の幼児の時から十数時間にわたる不衛生で苦しい労働に追いつかれ、夜はスラム同様の住居にねむるしかない多くの労働者を見、彼らの多くは成人する前に、病気や不具でたおれ、あるいは救いようもない精神的荒廃におちいるのを見ている。彼のことばによると「こうした貧困労働階層は大ブリテン及びアイルランドを含めて一千五百万人、すなわち全人口の四分の三にも及んで

いる」とのべられている。（『新社会観』前掲第一論文）

この状態を一刻も早く打解し、直接には労働者の一ひいてはすべての人々の福祉を実現することこそ彼の生涯をかけた課題であったのである。

## （二）教育による福祉の実現

すでに見て来たとおり、彼は、「幸福」のことばの中によい性格と富との両面をみており、ここに教育と福祉の統合の必然性は示されているのである。

さてこの実現の方法をどのように彼は考えていたのであろうか。一八一三年ごろに書かれ翌年刊行された新社会観第一論文、および第二論文等にみられるオウエンの思想では、これらの社会的な病根を強く指摘しつつも、それは環境の改善による性格形成、すなわち「教育」によって解決しうるものと考えていたようである。

オウエンが好んでくりかえす主張の一つに「性格は個人のために形成されるのであって個人によって形成されるものではない」（『ニューラナーク住民への講

演」渡辺義晴氏訳その他)

ということばがある。

これは言いかえれば、個人の性格は――よい性格にせよ悪い性格にせよ――その個人の責任に帰すべきものでなく、性格は専ら環境によって形成されるものである、という説である。

オウエンは、既成宗教をも、それが個人の罪の意識を強調する点を取りあげて強く批判している。

さて、彼の説の中で、性格形成を決定する「環境」とはいかなるものをさしているのであろうか。わたくしは、この点について、彼が身近な「環境」すなわち教育によってつくられる環境とより広い意味での「環境」、すなわち社会体制や経済機構などの二面を考えていたように考える。そして、はじめは前者すなわち身近な環境に直接の焦点がおかれ、より根本的な後者の問題はその背景に潜在的に把えられていたが、しだいに後者に焦点が移されてゆくように見られる。

五島茂氏は、オウエンの思想の発展を五つの時期に

分けていられるが(オウエン著作史)その中で主要なものとして第二期、すなわちオウエニズムの発展期(二八一四―一八二四)の諸論文を見ても、その初めと終りの著作ではこの二種の「環境」の重点のおき方に微妙なちがいがみられる。

「新社会観」第一論文のはじめに

「適当な手段を用いれば、どんな一般的性格でも、最善のものから最悪のものまで、最も無知なものから最も知識あるものまで、どんな社会にも、広く世界にでも附与することができる。しかもその手段の大部分は世事に影響力をもっている人たちが意のままにし、支配しているところのものである」

とのべられているが、その「適当な手段」とは何であろうか。

同じく「新社会観」に

「(前略)人間の幸福に至る進歩の第一段階に関する知識は、人類の大多数によって依然として知られていないか、または無視されている。ここにいう重要

な知識とは、総じて老人は総じて青年に、無知でみじめにするようにも、また知的で幸福にするようにも訓練することができるということである」

とあり、この手段とは、老人―成熟者が青年―未成熟者に行う「教育」を意味しているようである。とくに彼は幼児期の教育を重視し、

「人間の幸福は全然ではないにしても、主として彼をとりまいてゐる人々の意見と同様に、彼自身の意見と習慣に依存する。そしてどんな習慣でも幼児には与えることができるのであるから、彼らの幸福に寄与しうるような意見と習慣だけを彼らに与えてやらねばならないということが重要である」

(新社会観第三論文)

さらに、

気質や性向の多くは子供が二才にならないうちに、正しくも正しくなくも形成されるものだということや、また多くの永続的な印象は生れて十二ヶ月、否六ヶ月の終りには早くも与えられるものだということ

とは明瞭であるに相違ない」(同前)

と、非常に早い時期によい環境を役定することにより、よい性格は形成され、それが将来の幸福をもたらすものであることをのべている。

このように「新社会観」の段階では性格形成の要因は教育に焦点がおかれているが、これは勿論狭義の教育のみでなく、社会環境の浄化、健康的で清潔な衣食住の保障、各企業内で可能なかぎりの労働条件の改善などの必要が、くりかえし説かれている。しかし、これらはいずれも、前に仮に分類した「身近な環境」の改善に属するものであり、それが性格形成に直接影響を及ぼすという意味で、広義の教育的環境ということができる。

### (三) 性格形成の意味

つぎに、新社会観をはじめ彼が終始目標としている「性格形成」の意味を考えてみたい。

彼のいう性格形成の一つの重点は、「無知」からの解放である。人々が理性にめざめるとき、彼のおかれ

ている環境からの一方的な支配を脱することができ、自ら人間らしい生活をきりひろくことができると考えている。

しかし、それよりも一層大きな意味をもつのは、「愛情」あるいは「思いやり」である。これは、はじめは隣人愛としてあらわれ、やがて人類愛へと発展するのである。彼はいう。

それらの諸原理を実施することによってえられる、最も重要な利益の一つは、それらの原理によって各人は友人に対する思いやりをもつようにしむけられることである。(新社会観第二論文)

とある。具体的には、彼の学院では、

子どもたちが運動場や学校の紀律のもとにおかれて  
いる時間は、個人と村の福祉に肯献するようなやり  
方に従って、二才になる子どもが運動場に入る際に  
与えられた教訓即ち「仲間を幸福にするように努力  
せねばならぬ」という教訓は、彼が学校に入る際に  
くりかえされ、強調されるはずである(新社会観第

### 三論文

としている。

したがって当時の一般の学校で、学習の動機づけを「競争」においていたのを彼は否定し、「競争」に代り、「協同、一致の原則」と「思いやり」の原則とが指導の理念としてつらぬかれている。

これは、直接には彼自身の幼時の体験―心ない隣人が兄と彼とを比較して彼の方を優れたものとしてほめたことから、兄弟の情愛が阻害された経験―にもよると自叙伝にはのべられている。

彼は教育における「競争」の弊害を、このように直接的にとらえたばかりでなく、より一層根本的な次元でとらえている。すなわち、資本主義に含まれる競争の原則が、いかに人間性をそこなっているかを、すでに「新社会観」の中で漠然とながら把握しているのである。

そこで当時注目された、ペル及びランカスターの教授法を批判し、とくにそれが初期資本主義のシステム

すなわちマス・プロと競争の原則にささえられたシステムを評して、つぎのようにいっている。

ベル博士の制度にせよ、ランカスター氏の制度にせよ、それによって子供に読み、書き、計算、裁縫を教えることができるが、しかし自らは最悪の習慣を取得し、その精神を生涯不合理なものとしてしまいかもしれない」(新社会観第四論文)

また「自叙伝」の中で、彼の学院の幼児クラスの教員に指示したことばとしてあげている。

「幼児、小児に言え。『全力をあげてしょっちゅう遊び仲間を幸福にするようにしなくてはならぬ―年かきの四才から六才までの者は、年下の者を特別に世話し、また力を合せてお互いが幸福になるよう教えよ』と」

性格形成のために彼が設定した環境とは、広く明るい遊戯室や、動物の絵、種々の自然物などの物的環境もあったが、主として人的環境、すなわち、理性と思いやりに満ちた環境を通して、協力により、自他とも

に幸福になろうとするふんいきをさしている。

芝野庄太郎氏が「ロバート・オウエンの教育思想」の序説で、

質においては、資本主義のもたらす人間疎外を克服して理想の社会、すなわち福祉社会を建設しようとする社会改革は、社会を構成する個々人の性格を合理的に形成する教育においてのみ可能である。社会改革は教育においてのみ可能である。

とのべているのは、「新社会観」の時期のオウエンについては妥当といえる。

しかし、数年後には、やや彼の思想は変化し、教育と福祉との直線的なむすびつきだけでなく、もう少し広い視野がひらかれて来ることは、芝野氏も、渡辺義晴氏らもみとめていられる。

#### (四) 社会機構の改革の手段としての啓蒙

五島茂氏のいわれる、第二期「オウエニズムの発展期」に属する論文でも、その期の半ば以後には教育と社会との関係をしだいに新しい角度から考えるように



なっている。

前記の通りすでに以前から、オウエンは、幼少労働者の酷使を強く憂え、まず自ら管理する工場での最低年令の引上げと労働条件の改善とを試みて好ましい結果を得ているが、彼はこれを自らの工場に実施するだけでなく、法制化する必要を感じ、すでに一八一五年「工場制度の影響にかんする考察」を書くと同時に、工場法の制定を提案している。しかし、この論文では、資本主義の発展と、工業技術の進歩が、反って民衆に不幸と害悪をもたらすと単純に論じ、過去の社会すなわち農業や手工業中心の生産形態のもとでは、最低の階級でさえ、はるかに人間らしい健康的な生活をもつことができたとしている。工業資本主義の初期における、露骨な、無制限な酷使と搾取とは、たしかに甚だしい人間疎外の現象を来し、過去の時代をよかりし時代と回顧しているのも当然であろう。しかし、この時期には未だ、その真の原因が何であるかを彼は把握することができなかった。そこでその害悪を最少限

に止めるための工場法の制定を唱えていたのであった。

前述のとおり、彼の思想の中に終始一貫しているものは、「環境によって個人の性格が形成される」と考えていたが、この環境は、はじめは身近な、直接的なものとして扱えられ、しだいにより広い、社会制度や経済機構の問題としてとらえられるようになる。一八一五年の工場法の制定の提案のうち、一八一六年ごろには、さらにこの考察は深まり、「ニューラナーク住民への講演」では、

私はみなさんを侵している害悪の原因を冷静に研究しました。間もなく、その直接的諸原因は明らかになりましたし、遠因とか間接的原因もまたわかって来ました。(渡辺義晴氏訳)

とのべている。ただしこの直接的原因は、いわばさきに分けたうちの「身近な環境」であることは明らかであり、それをのぞましいものにする第一歩として、性格形成学院の設立の趣旨をのべているが、この講演で

は「遠因」については明言していない。ただし彼はこの講演で

しかし将来、犯罪と貧困のない、非常によく改良された健康と、いうに足りない非惨（もしあるとすれば）と、いまの百倍にも増加した知性と幸福とをもった社会が形成されるということを知っておりま  
す。そして、げんざいこういう社会状態が世界じゅうに普及するのを妨害しているのは無知でありま  
す。しかしそれ以外にはありません。

とのべ、前年に書かれた「工場制度の影響にかんする考察」よりも、思想的には一步前進した立場をとっている。すなわちさきには、資本主義以前の状態をよかりし時代として回顧しているのに対し、ここでは、将来により一層すすんだ福祉社会が実現されることを期待している。

次の段階（数年後）には彼はより明確に問題を分析し、「経済学の全面にわたる非常に深い研究が必要であります。」と述べている。しかもこの経済学は、従来

のように個人の利益の追求を基本とする近世以来の経済学であってはならないとのべ、そのような誤った根拠の上に立つ経済学は、それがいかに精密な構成をなされようとも、むしろこの害悪を助長する役割しかもたないと考えている。そこで、彼のいう、新しい経済学の原理とは何であろうか。彼は端的に、

価値の自然的尺度は、もともと人間の労働いかえれば、はたらかせた人間の肉体と精神との諸力の複合である。（「ラナーク州の報告」渡辺晴氏訳）と言明している。すなわち彼は従来の経済の観念において、貨幣を価値尺度としたのに対し、彼は「人間の労働」を価値の尺度におきかえようとするのである。

このように価値尺度を変更することにより、いわゆる後に工業技術の進歩により増大された富は、労働者を圧迫するどころか、かえって労働者に公平に還元され、労働者―ひいてはすべての人間の福祉の増進に役立つことになるという。彼は長年、模索しつづけた新しい原則を、ここに至って明快に把握しえた

考えられる。

オウエンは、価値の「自然的尺度」は人間の労働の量にあるとし、それがあやまって「人為的尺度」すなわち貨幣価におきかえられたため、富は偏在し、技術の発達と反比例して、労働者に酷使と搾取の圧力にあえぐようになったとしている。そこで、この誤診をうちやぶり、再び自然的尺度が社会を支配するようになったとき、労働者をはじめとして、すべての人々の福祉が実現すると考えている。この「自然」から「人為」に変わり、再び「高次の自然」へという考え方は、ルソーのいう「自然状態」から「社会状態」へさらにそれを克服した高次の「自然状態」へという構想と相通ずるものがある。

この変更によって、工業技術は労働者に富の分配を潤沢にするだけでなく、「適当な教育をほどこすための時間と手段がえられるようになるので」労働者の性格形成に一層容易に行われるようになる。彼はのべている。かつて、害悪の根元であった工業技術の進歩

は、このように、価値の尺度をおきかえることにより、人間の福祉に資するようになる。こうして民衆ははじめにかかげた幸福の二つの条件、「よい性格」と「潤沢な富」とを二つながら同時に得ることができるとしている。

このようにして、いわゆる第二期の中でもオウエンの思想はしだいに単純ながら明快な論理をもつに至ったが、この背景には彼が性格形成学院の実践の中で得た体験がうらづけとなっているものと考えられる。

この「労働による価値の尺度」は、きわめて素朴ながら、後のマルキシズムの余剰価値説と似た、注目すべき見解である。しかし、両者の差違は、第一に諸家がみとめているように、オウエンの場合、弁証法的な発展の法則が未だ導入されていないので、これを阻害しているのは「無知」のみであり、したがって、「啓蒙」によってのみ、この真理は世に広められ、人類の福祉は実現すると考えている点である。ここに、一旦社会的、経済的な根本問題に到達した彼が、その実

践の手段を、「啓蒙」に求めて再び「教育」の立場に戻って来たゆえんがある。

第二の相違は、この改革にあたっては、一時的にもせよ、いかなる階級の利益をも減少させることなく、すべての人々の福祉が円滑に実現されることを期待している点である。価値の尺度の変化と、富の再配分の過程では当然、一時的には、一部の特権階級が独占していた利益を減少させることも起りうるが、ヒューマニストのオウエンは、一人の犠牲をも望まないのである。もちろん一般の啓蒙思想家が「すべての人類」というとき、それは「市民階級」を典型として考えているのに対し、オウエンは「労働者階級」を典型として考えている点に、大きな特色はあるが、しかし、観念的な点は共通している。

しかし、わたくしは、これを、単に空想的なオプティミズムと片づけることのできないものを彼の姿勢の中に見出すのである。

これは、多くの教育思想家——とくに教育の実践の場

から出発した思想家たちに、共通した傾向とも見られる。彼らはヒューマニズムの立場から、人類の幸福を阻む諸条件を追求し、当然教育の限界内では解決できない問題にゆき当る。しかし、改革の過程においても、一人の人間をも犠牲にしがたいところから、教育と社会とのかかわりに対して、論理は循環し、再びその方途を個人の改造すなわち教育の側にもちかえる結果となる。これは論理の不徹底ともいえるが、しかし、わたくしは教育者たちが、「人を育てる」という役割の性質上、ヒューマニズムの枠の外には出られず、これに徹しようとするところに、その独自の立場が存するとも考えるのである。

ともあれ、オウエンは、「身近な環境」のみならず「より広い環境」すなわち社会体制、経済機構の問題の探究に至ったとき、前にのべたのとは異ったより深い次元で、再び社会の福祉と教育の関連を求めているのである。

#### (五) 救貧政策に対する批判

一般に、近代の社会福祉の源流をたどるとき、個人的な慈善から公的な制度への転換という意味で英国救貧法がとりあげられるのが通例である。

そこで、教育と福祉の関連を主題とするとき、オウエンがこれに対してとった見解にもふれなければならぬ。

周知の通り、英国救貧法は、公的制度への転換という歴史的な意味にあるが、それが人権思想に基ずくものでなく、むしろ治安維持的な性格をもち、しかもそれが却って貧民に怠情と無氣力を助長するようになる、それを防ぐため処遇はますます制限的、むしろ懲罰的なものとなり、一層人間性の荒廃を来す悪循環を見たといわれる。オウエンは、これを強く批判して救貧法は困窮者に援助を与えるような外観を呈しているが、実は貧民に最悪の習慣を獲得させ、あらゆる種類の犯罪を実行するように準備しているのである。こうして救貧法は貧民の数と、かれらの困窮を増大させる。したがって断平かつ有効な手段を採用

して、現存の法律がつくり出した害悪を除去することが必要となって来る。(新社会観第四論文)

といい、これに代るに「犯罪予防および人間性格形成のための制度」を提唱している。この中心は、やはり環境の改善にあるが、その原動力は教育にあるとし、とくに悪習にそまらない幼児期に、幸福な、また教育的な環境を与えることにより、救貧法にはるかに優る効果を得ようとしている。この論文では未だ余剰価値の問題にはふれていないので、やや抽象的ではあるが、救貧法を否定した上で立てた彼の構想の中には、むしろ最新の社会福祉の方向―「パーソナリティ・デベロップメント」などに示されるような社会的視野に立つ人格復興論―に近いものが素朴ながら見出せるのである。

### 三 児童の人権思想に基づく教育と福祉の結合

はじめにかかげた第二の観点については、紙数の関

係上詳しくふれる余裕がない。しかし、彼の実践の中にも、理論の中にも、児童自身の人権の尊重と、その観点から来る教育および福祉の関連は、つねに、最も自然な形であらわれている。

彼が一八〇〇年ごろ、はじめて工場の経営に当たったとき、まず見たのは、幼少労働者の酷使にもとづく不具、病気、および精神的な荒廃であった。丘父デイルの紡績工場では、デイルの善意により子どもたちにも与えられた教育と、レクリエーションの施設が、子どもの幸福のために役立っていないことを知り、十才未満の子の、十数時間もの労働のあとに与えられる教育や慰安は、却って子どもの過労をつのらせる結果になっていることを知った。これこそ彼の課題の出発点であった。

以来、雇傭の最低年令の引上げや労働時間の短縮明るく健康的な衣食住の保障などの福祉的な対象と、二才から六才までの幼稚園と、六才から十才までの全日制小学校、更に余暇教育へと展開する教育的な対策

は、全く平行して進められ、彼の意識の中では終始一つのものに統合されていたように見える。

「子供は無訓練、無教育の両親の、あやまった取扱いを、現在実行可能な範囲で免れるであろう」(新社会観)

「親たちは、子供がひとり歩きできる時期から、学校にはいるまでの間、子供の附添いから現に生じている時間の損失と世話と心配から解放されるであろう。

子供は安全な場所におかれ、そこで未来の学校友達や仲間たちとともに最善の習慣と原理を習得し、食事時間と夜は両親のあたたかい家に帰ってゆくであろう。そして親たちは、離れていることによって、

相互の愛情は恐らく深められるであろう」(新社会観)

といい、幼年教育が、家庭の欠陥を補いながらも、家庭における親子関係を充分尊重していることがわかる。児童の人権の尊重を中心として、保護、教育、親の労力の軽減、そして親子関係の調整に至るまで、現

在の児童福祉と教育が目ざす諸の目標は、至って素朴な、自然な形で綜合されているのである。

このプランの実施の結果、「自叙伝」によれば子どもたちは、学院があまりにたのしくて、夕方にも帰りがたらず困ったほどであるという。

オウエンにおいては、児童の福祉と教育とは統合するというより、始めから一つのものと考えられていたかの如くみられる。

#### 四 むすび

四回にわたり、近代における教育と福祉との接点を求めて、ルソーからオウエンに至る思想的な展開を見て来たが、あまりに大きな主題に対して、粗雑な考察しかなしえなかったことは残念である。ただ、ここにわずかに知りえたことは、彼らの中に共通した一脈の流れ、すなわち、第一に人類の幸福の増進―物質的および精神的な―に対する強い希求の精神である。しか

もそれは観念的なものとしてでなく、最も貧しい、最も低い階層のものにも、平等に人間らしい幸福があたえられるようにという、現実的なねがいである。第二にそれを阻むものを追求するうちに、人間をとりまく環境の根源、―社会体制、経済機構の矛盾にゆきあたっている。ここから彼らは、社会改革の必要を痛感するのである。第三に、しかも彼らはその障害をとりのぞく原動力を、主として教育におき、個人の啓蒙と、人類愛の自覚に力をそそいでいる点である。勿論絶対主義体制末期にあったルソー、市民革命の渦中にあったコンドルセ、農村の崩壊と革命の余波をうけとめたペスタロッチ、および産業革命の発展期にすでにその中にはらむ矛盾ととりくんだオウエンの四者は、社会的背景も、彼ら自身の思想的立場も異なるが、その中に一貫するものは、高い次元における福祉と教育の綜合である。

すべて学問は、発達するとともに分化と、専門化の傾向をたどるのが通例であるが、同時にそれと平行し

て諸領域の関連性がみとめられ、総合化、体系化の方向もめばえて来るものである。

現在、教育学において社会的視野が広がり、又福祉学が消極的なものから、積極的なものとかわりつつあり、この二つの領域は独立を保ちつつも、内容的にはかえって関連と、接近がみられるようになった。

この際、この二つの領域の関連について根本的に考えるための、一つの手がかりとして、両者が別個の学問体系として確立する以前の思想の中に、その両者が、本質的な意味で総合されている姿を見た次第である。

今後これらの中で得た観点にもとずいて、さらにこの問題の探究を深めたいと考えている。(完)